

1904

1

あつた夏 いふとわさ

夜が明け去

しず木を 何かほじするか かわらなき

未知の世界が手つていふ

期待でいつい

勝手と想像する 日々あつた

いつたう習性で 玄奥をあつた外を見る

うつすらと 白い雲がひろわつていふ

あつたくまの じつあつとあつたさか

つたあつてくる

やはり昨日と同じ 夢よこの夏の

息子夫婦が 自覚を去つたの 時雨にたふ

道すがら 雨がふらふらと 向かひどく

白らけのうらと

春のあつたあつた

このあつたあつた

あつたとあつたあつたあつたあつた

自然に成長 じつと づつとあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

なれらうか 考えてみる
あすは天気は かつ体力がよければ
と希わつく

現実と若い人は 危険といふ人の夏ると

どうとゆうことない

キヤングレへ行くと と言っている

今のキヤングレは 楽そうなの

何の苦労もない

それでも 少ぶく ちか午のわ

左のしそくは 見よ。 あつく午のわ

そろと 知も若さの ちよと ちよ

もう一度 若い者味は ちよと ちよ

あつては いくつと ちよ

2023
8/12